

21世紀にキリストを生きる

21世紀にキリストを生きる

2012年 海外訪問で目を開かれたこと

<私たちの社会に電気がもたらした功罪>

東日本大震災以来1年間、相互交流パートナーシップを深めるための海外訪問をすべて延期していた。大震災によって、それまで鬱々としていた社会が揺り動かされていることを感じながら一周年が近づいた。その頃、聖書の神こそ世界のすべての民族を造られたということが、しばしば思い起こされるようになった。「これは日本だけの課題じゃない。世界の人々と連携することで世界大の神様の視点から共に学びあえるのではないか」という新鮮な思いが湧き上がってきた。「今だから、目の曇りが取り去られて見えてくるものがあるはず」と。

福島県訪問を挟みながら4月から11月初めまで、バングラデシュ、ガーナ、ニジェール、インド、ウクライナという5つの国を訪問した。

久しぶりに外に出て「ここは、まだ途上国だなあ」と私が判断していたものさしが、「停電の有無」だったことに気がついた。非常事態でない限り、貧しい国でも市場に行けば食料はふんだんにあり、ごはんが十分食べられないのは食料不足ではなく、各人の購買力であることを学んだ。

それに対して、電気の安定供給は大規模投資を必要とする社会インフラに依存する。



発電施設に始まって遠くの地域まで張り巡らされる送電網、変

電設備、各家庭への配線と今まで気にもしなかった電気の供給は、実は、高度な社会インフラだったことに東日本大震災後、気づかされた。

今年、バングラデシュで過ごしたイースターは天に召されて10周年を迎える友の家族との祈りの時だったが、思い出を語り、祈りあうその晩も数時間、停電が続いた。暑いバングラデシュの夜を過ごすのに、現地の人もエアコンがなくても扇風機は廻したいし、やっと買ったTVも楽しみたいものだ。夜の電力不足は恒常的で国の総電力量は不足し、地域ごとの輪番停電らしきものが前触れもなく、突然起こる。すると、動くことなくバングラ式手動回転団扇を取り出し、パタパタやりながら語り合い続ける。電気の頼りなさも織り込んだオン・オフ生活だった。電気への完全依存はあり得ない。電気がなければ、自力で創意工夫、一人で暗闇にいるのもなんなので、誰かがつけるろうそくや懐中電灯のまわりにみんなが自然に集まってくる。

それはガーナでも、砂漠の地で共に夕涼みしていたニジェールでも、電気がまだ引かれていないインドの農村でもそうだった。

震災後に海外に出て、あらためて電気によって、日本社会では、庶民の私たちが驚くほど快適な生活、心ゆくまでの満足を追及する力を手に入れていたことに気がつかされた。私たちはあふれる電気でのどのような社会を目指していたのだろうか。私たちは「苦勞」という文字を消し去ろうとしていたのだろうか。面倒すべてを消滅する快適さを最大化する社会は、誰かのための創意

工夫や協力して共に過ごすという社会の姿を最小化、それどころかその機会を奪い取っているのかもしれない。

現代社会の私たちが抱える孤独や無関心という慢性病から回復するために、あえて電気を使わない小さな生活領域を設けるのはどうだろう。電気が可能にしてくれていた、一人で気ままにインターネットに没頭する代わりに創意工夫したり、薄明かりのなかで人と共に過ごす醍醐味を体験してみたら、私たちが造られた意味が見えてくるのかもしれない。

「光があること」、「共に生きる隣人がすぐそばにいること」のありがたさに、まったく気づかないほど電気が生み出した快適さに私たちは依存しきっている。世界の大多数の人々には当たり前の「時々電気がないのも生活のうち」という電気との距離感が、私たちが失っている「人の本来の生き方」を取り戻させてくれるような気が始めている。

<少数の人の生き方が変わり、地域活性>

一年間日本で過ごした後、海外に出かけてみると、その間にも世界は確実に変化していることを実感する。

2年ぶりのガーナ。1年半ぶりの北インド。「声なき者の友」の輪を通して、祈り応援されている地域で、一握りの志ある人々の献身的な行動が地域全体を変え始めていた。

ガーナのアクラの一つの教会では、2年前に20人前後だった「隣人を愛する習慣づくりグループ」が150人ほどに増加し、3つのグループが毎週の分かち合いと励まし



会を行うまでになっていた。このグループが急速に大きくなったのは、以前から地道

に活動していた中核のリーダー達が、新しいアプローチを取り入れ信念をもって輪を広げようとしたからだ。自分が持っているものや賜物で誰かが立ち直り始めたら、その人を支援される側のままにせず、賜物を評価して支援する側になるように励ます。

「あなたは自分だけでなく、他の人を立ち上がらせることが出来る能力が与えられている！」自分ではダメと思っても賜物を与えてくださった方がいる。そのメッセージと励ましには力があつた。

このアプローチはアクラから200キロほど離れた町ケープ・コーストでも用いられ、2年前に会い、町へのビジョンを与えられたジョシュア牧師が核となって輪が広がっ



ていた。(写真中央がジョシュア牧師に触発され、自分の数か月の利益1万円ほどを差し出したマリアさんと支援されたお店。)

北インドでは、「ダリット尊厳回復」に取り組むラムスラットさんが2011年に蒔いた種、「平等な尊厳を与えられた一人ひとり」に応答したジョゲッシュワールさんが家族や村人の反対を押し切って慣習として使っていたダリットの友人用のお皿を捨てた。そしてみなで食事をする企画を始めていた。聞く



耳を持つ村人が食事会に集まるようになったという。一人の勇気ある決断が、村や村を越えた地域を変え始めている。

世界の歴史を生きる一救い主を信じるユダヤ人と出会う

<3月の福島未来会議2で迎えたボリス師と再び>

東日本大震災一周年の今年3月、「声なき者の友」の輪では、未来を担う福島県の若者たちに夢を抱いて欲しいと福島未来会議2を企画した。そのときお呼びしたのが26年前にチェルノブイリ原発事故を経験したウクライナのキエフに暮らすボリス氏だ。事故当時20代最後だったボリス氏が旧ソ連の緊急事態で経験、苦闘した中から学んだことを、福島事故後1年を迎える若者たちに伝え、そのうえで25年を越える先の展望を描いてもらおうというものだった。

ボリス氏はイエス・キリストを救い主と信じるユダヤ人（メシアニック・ジュー）で、キエフ集会の牧師だ。新約聖書のローマ人への手紙などでパウロが語ったユダヤ人の救いを約束された神の真実さと心が開かれるようにという祈りに、神は二千年の後も応え続けてくださっていることをボリス氏のお話を聞いて思わずいられなかったという。ユダヤ教に厳格な父の下で育ったが、科学を学び論理的なボリス氏は無神論だった。原発事故後、自分の能力ではどうしようもない状況にぶちあたり、旧約聖書を読み直し、イエスを伝える集会に出て



みた。それがきっかけでイエスという方に出会い、原発事故3年後に救

い主として受け入れたそうだ。ユダヤ人への神のご計画はいつか成就するのだろう、くらいの遠い世界の話に思っていたことが、突然、原発事故という共通の出来事を通してメシアニック・ジューの

方と身近になったのだ。旧約聖書に描かれた世界の歴史の本流とは全く離れた支流にいたように思っていたが、気がつけば、アブラハム、イサク、ヤコブの神が今も文字通り、世界を導いておられる現実をメシアニック・ジューの方々を通して目で見る機会に遭遇していた。

10月には、ウクライナを訪問する機会が与えられた。福島牧師先生方と共にチェルノブイリと現地の人々の声を聞くツアーを企画できたのだ。（写真：チェルノブイリ制限区域内。FUKUSIMAの看板と共に）



私はチェルノブイリ訪問後、ウクライナに滞在し、キエフのメシアニック・ジューの礼拝に出席した。また、旧ソ連から集まったメシアニック・ジューや関係する教会指導者の研修会にも参加させていただいた。

メシアニック・ジュー、特に聖書にも造詣の深いボリス氏の話で心に強く迫ってきたのが、ユダヤ人の視点での聖書の読み方だった。それまで聖書のイスラエルの民やユダヤ人の記述を「神の民」と読み替え、教会やキリスト者である自分のこととしてすべて読んできたことを感じた。新約でパウロが語るように、イエス様の復活以降もユダヤ人には特別の役割があることをほとんど考えてこなかった。西洋ではキリスト教がローマ帝国国教に制定されて以来「反ユダヤ主義」が浸透し、ユダヤ人迫害が何度も繰り返される中で聖書とは違う「ユダヤ人＝反キリスト」の図式が出来上がっていったという。聖書にはそもそも教派など

なく、唯一あった分類は「ユダヤ人と異邦人」だった。ローマ書3章では、ユダヤ人の特別性とユダヤ人も異邦人も同じ罪の下にあるという共通性が記されている。世界がイエス・キリストに服するときまで、私は神様から託された役割を「異邦人」の立場でどのように果たしていくのか。現代世界でイエス様に従うようになったユダヤ人の人々だからこそ、語ることが出来る聖書の視点をさらに知りたいと思わされた。

「異邦人」の立場でどの



ように果たしていくのか。現代世界でイエス様に従うようになったユダヤ人の人々だからこそ、語ることが出来る聖書の視点をさらに知りたいと思わされた。

ユダヤ人としてお生まれになったイエス様によって、その幹に接木される恵みに与った私が、原発事故がきっかけとなり、旧約の時代も現代も神が導かれる世界の歴史の本流に目を開かれ始めたのだ。

<本当のへりくだり>

ウクライナ最後の晩に泊めていただいたナターシャさんは、15才のとき悪夢の爆発が起きた原発から2キロのプリピャチ市で暮らしていた。ソ連全土から見学者が後を絶たない理想都市として建設されて16年目。彼女は当時、人間の能力だけを信じていた。が、高放射能雲の直撃を受けて最悪の場合、町の人が全滅するかもしれないという人間にはどうにもならない状況だった。そのとき、強烈な神の存在を感じたという。放射能雲は不思議なことに町の手前で二手

に分かれて迂回した。後に町の地下教会の人々が熱心に祈っていたことを聞いたのだ。それがきっかけで「神は人間の力を超えて今も働いておられる」と確信し、数年後に聖書の神様に会い、信じたという。

「私の力で何もかも思い通りにできる。私の思い通りにして当たり前。」この高ぶりから解放されてへりくだる時、今も生きて働いておられる神に出会えることを、原発事故の証人が厳かに語ってくれた。

「お祈りください」

■ 2013年1月、「隣人を愛する習慣づくりセミナー」を始めて10周年の韓国の方々から学びます：日本と同じく社会の激動を迎えている韓国で、仕えている教会との交わりのため。

■ ウクライナを訪問された福島県の先生方や教会、そして福島県に暮らし続けて困難に向き合っている方々のため：「恐れ」が人を滅ぼす。ウクライナからの大切な学びが、今後の福島県に生かされますように。

2012年のクリスマスまで、あとひと月になりました。主がしてくださったこの一年の恵みを数え、皆様が親しい方々との喜びにあふれるクリスマスを迎えますように。主にある新たな希望の年2013年となりますように、主の祝福を心からお祈りしつつ。

柳沢 美登里

2012年11月17日

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、お祈りとご支援をよろしくお願いいたします。活動報告は随時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。

郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201

柳沢へのご支援は「柳沢支援」と明記ください。領収書は振込票で代わりとさせていただきます。ご了承ください。主の働きを共にさせていただく恵みを感謝して。